

『逆説の日本史』を読んで

大津 隆文

最近『逆説の日本史』に嵌っている。全二十八巻の大著で第一巻の古代編からではなく、第二十八巻の大正混迷編から遡り現在は第二十一巻だ。著者は井沢元彦氏、TBS報道局記者から小説家に転じ、本作は『週刊ポスト』に一九九二年から連載中の作品を順次取りまとめたもの。

ドキュメンタリー調で講談を聞いている気分だ。細部も驚くほどよく調査、蘊蓄が披露される（例えば、西郷隆盛が通称吉之助から隆盛になったのは太政官布告で名前を一つに統一することになったため、従来は実名（諱）は口にするのをはばかった、本当は隆盛ではなく隆永だったが届けを誤った）。

氏は史実を重視するが、世の歴史学者に対して史料に囚われすぎと批判的。史料に無いことを想定し、時には史料の真実性も疑うべきとする（記録を残すのは勝者）。

そして日本史全体を貫くいわば日本教として次の三点が重要であり、この視点を踏まえ歴史を見るべきとする。①ケガレ忌避（古代には天皇が崩御すると（死は最大のケガレ）遷都）②言霊信仰（口にした言葉は現実になり時には責任を追及される↓戦争に勝てないは禁句）③怨霊鎮魂（英霊の死を無駄にするな）。興味深い視点だが、正統的な歴史学者は思い込みとして相手にせず、それが氏には大きな不満のようだ。

また繰り返されるのが、朝日新聞に対する厳しい批判である。北朝鮮を賛美し帰還運動を応援したこと、従軍慰安婦問題について虚偽の吉田証言を真実として報道し、かつ過ちを長期に、潔く認めなかったこと等、既成の権威に対する容赦ない批判には胸の空く思いがする。

また、中国、韓国が日本と違い近代化に立ち後れたのは、祖法の遵守を教義とする朱子学の桎梏のせいとする。私は科挙は人材登用という点で、公平で大変優れた制度と思っていたが、科挙試験は朱子学の国教化をもたらしたとし、近代初頭西洋（日本を含む）の圧力に苦しんだ中国、韓国に全く同情はない。

今しばらく本シリーズを楽しませてもらう。